

ラオスのこども通信

発行：特定非営利活動法人 ラオスのこども 〒143-0025 東京都大田区南馬込6-29-12, 303 TEL/FAX 03-3755-1603

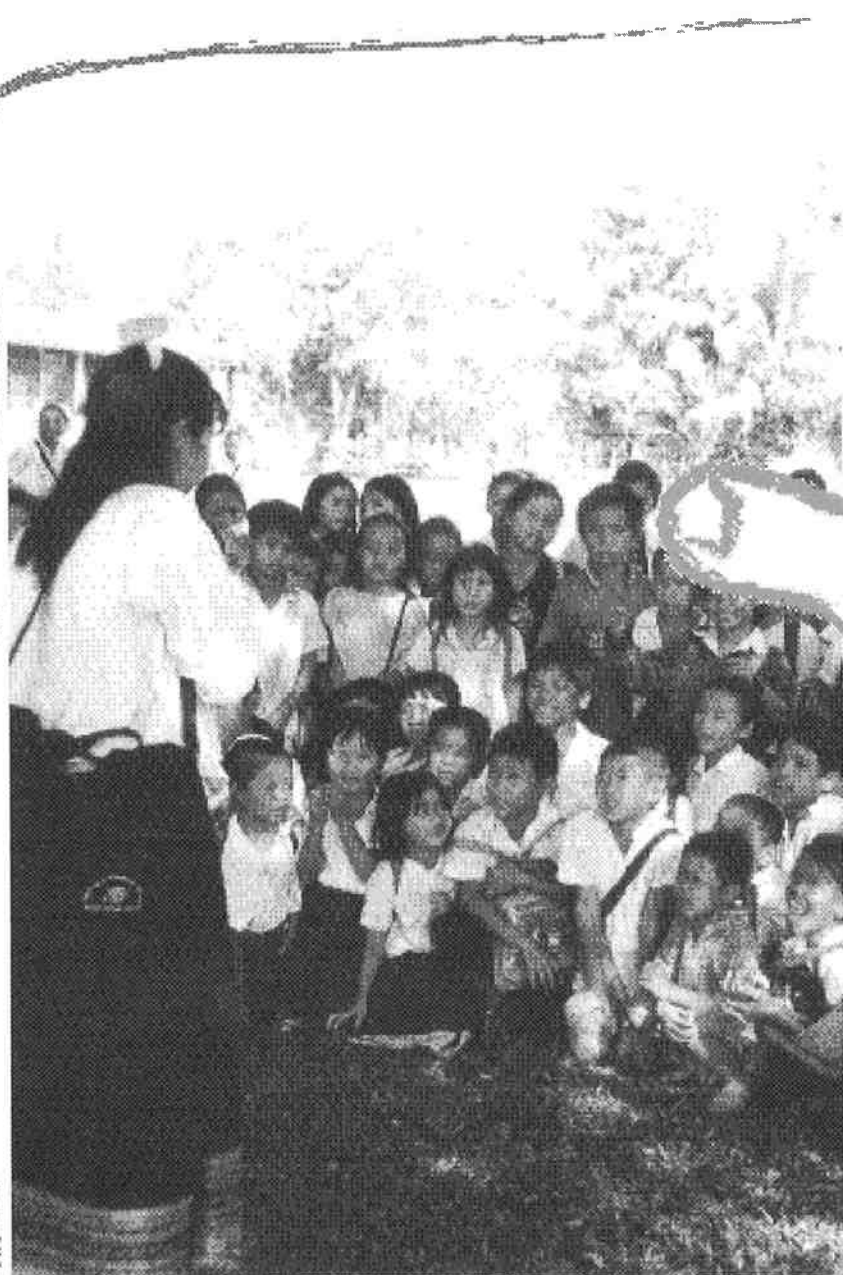
34号

2005年7月発行



特集 子どもたちに聞きました……2

- プロジェクトの動き 学校図書室……4
- プロジェクトの動き 読書推進運動……6
- ロンドンからの報告 図書袋に感嘆の声……7
- 国内の活動……8
- ヴィエンチャン事務所／東京事務所から……10
- NGO ネットワーク……11
- 活動に参加し支えてくださったみなさん……12



ラオスの子どもたちと いっしょに、 未来をつかむ活動を

英語の団体名称として、ACTION WITH LAO CHILDREN を申請していましたが、このほどラオス政府から正式に認可されました。

日本からの一方的な支援ではなく、ラオスの子どもたちも参加して、日本とラオス、大人と子どもが「いっしょに」活動していこう、という気持ちを込めました。略称はA L C。

Deknoylao (デクノイラーオ) は、これからも愛称として、日本とラオスで使用します。

7月から2005年度が始まります。中期3か年計画の折り返し点の年、いっそうのご支援をお願いいたします。

特定非営利活動法人ラオスのこどもは、子ども自らが学ぶ力を伸ばしていくために、ラオスで、「絵本、紙芝居などの出版」「図書室」「集い楽しみ学べる場」などの支援を行っています。

子どもたちに 聞きました！

会は、ラオス各地の学校を図書の利用の調査で訪問しています。
そのとき、子どもたちにも、読書、勉強、遊び、暮らしなどについて
インタビューします。昨年から今年にかけて集めた声を紹介します。

Q1「登校前や放課後、何をしているの？」

Q2「何をしているときが楽しい？」

Q3「本は、どこで読んでいるの？」



Q1「登校前や放課後、何をしているの？」

最も多い答えは、予想通り「手伝い」。
何を手伝っているのかを聞くと、多くが「家事」、その
中でも多いのが「御飯を炊くこと」。そして「食器洗い」
「水くみ」「家畜の世話」の順です。

高学年になると、家業の手伝いが増え「市場でものを
売る」「畑仕事」など。

チャムパサックでの調査だったので、土地柄から
「コーヒー豆の収穫」「茶摘み」なども。

「テレビを見る」は低学年ほど多く、高学年になると
「スポーツをする」子どもが増えます。

人気は「サッカー」「水泳」(川で泳ぐ)。
女の子は「ゴム跳び」「(遊び)のような気がありますが、
子どもたちに「どんなスポーツ？」と聞くと、「ゴム跳
び」という返答でしたので、「スポーツ」に入れました)
なお、「読書」という回答は少なかったのですが、これ
は当会が配付セミナーを実施する前の調査時の回答で
す。

Q2「何をしているときが楽しい？」

いちばん多かったのは「学校に来ること」。

理由は「友だちに会えるから」。学校の行き帰りや休み
時間に、友だちと過ごす時間が何よりも楽しいよう
です。

少数意見では、「稲を運ぶ」。「どうして？」と聞くと、
友だちとどのぐらい多く運べるか競走をして、勝った
ときがうれしいから。

ある地方で見かけた光景では、井戸端で数人の子ど
もたちが一緒に水汲みをしていて、じゃんけんで負けた
人がつるべを引っぱる役、勝った方が空のバケツを置
く役と決め、何回もじゃんけんをして交替しながら、
楽しげな様子でした。大変そうな仕事でも、子どもた
ちは楽しみながらやる方法を考えるのが本当に上手で
す。



Q3「本は、どこで読んでいるの？」

学校が6割ちかく。

「自宅ではほとんど本を読まない」という子に、理由
を尋ねると、家では家事手伝いで忙しく読む時間がな
いことと、学校で本を全部読んでしまうから、という
ことでした。子どもによっては、市場で物売りをする
合間に、畑仕事の休憩時間に本を読む、という回答も
ありました。

Q1、Q2はチャ
ムパサック県、サ
ラワン県の小学校
12校(35クラス)で
実施。

Q3は、ボーケオ
県、セコーン県、カ
ンムワン県の小学
校21校(21クラス)
で実施。

大学卒の若者たちにも聞きました

ヴィエンチャンで大学を卒業し、英語を流暢に話す若者たちにインタビューしました。

「本は好き？」と聞くと「もちろん」と返答。

「じゃあ、どんな分野の本が好き？」と聞くと、答えて詰まってしまいます。たくさんの本がない状況では、好みの分野を答えるのは難しいのだということに気づかされました。

「お気に入りの本の題名を教えて？」という質問に変えてみると、いくつか挙がりましたが、「Step by Step」と英語テキストを答える人もいました。「ピノキオ」と答える人もいましたが、よく聞くと、やはり英語のテキストでした。

学校訪問調査に出かけたとき、ヴィエンチャン県

の小学校で、図書が本棚に並べられた図書室を見て、同行した通訳が思わず「いいなあ」と呟きました。ヴィエンチャン市内で育ち、海外留学の経験もある彼は、自分の小中高校時代、学校に図書室がなく、本に接する機会がなかったと言っていました。ラオスで読書推進運動が始まって15年。まだまだ、図書が行き渡っていないことを感じた出来事でした。

いつの日かインタビューをした学生が、「お気に入りの1冊」として私たちが作った本の題名を上げてくれる日が来ることを願いつつ、今年度の配付の準備を始めました。（赤井朱子）

子どもたち、可憐な花

今年のピーマイパーティはラオス国営航空のご協賛で航空券プレゼントを企画しました。みごとラオスの旅を当てた、パーティ参加者の幅みち子さんの子どもの教育開発センター（CEC）訪問記を紹介します。

空から眺めたメコン河は、茶色の絵の具と太い筆で、ゆっくり力を入れて縦に曲線を描いたような感じ。とても存在感があります。

訪れた5月末は雨に降られることもしばしば。店の軒でぼんやり雨宿りをするのも悪くない気分です。

日曜日、CECを訪れました。30人は集まっていたでしょうか。モダンな造りの建物の中では、紙芝居、ゲーム、踊りの練習、本を読んだり、絵を描いたり、お庭ではフラフープをしたり、楽しそうな子どもたちの姿が見られ、ゆったりして、風を感じられる心地良い場所です。

滑り台で3人の女の子が遊んでいて、それぞれ手に可愛いピンク色の花を持っていました。

「綺麗だね、どこに咲いているの？」

と尋ねると、ちょっとはにかんだ彼女たちは頭上を指差します。「え？どこ？」周りに茂っている木をよく見ると、緑の葉の中に愛らしいピンク色の花がぽぽっと咲いていました。もの静かで可憐な感じが彼女たちに似ている気がしました。

部屋で子どもたちと絵本を見ていると人の気配がしたので振り向くと、さっき滑り台で遊んでいた女の子の1人が立っていました。手にはあのピンク色の花が2つ。私の方に差し出してくれたのです。（え？くれるの？）予想していなかった贈り物にびっくり。さ



ラオス訪問記
協賛：ラオス国営航空

りげない彼女の気持ちが嬉しくて、心があたたかくなったのです。

持っていた長い縄は、縄跳び用と思いましたが、大勢で跳ぶと引っかかることが多く、すぐに綱引きになっていました。裸足になっての戦いに私も参戦。勝敗はあまり関係ないようで、元気に楽しんでいる姿が気持ちよく感じられました。

子どもたちは色々と話しかけてくれて、私のいいかげんなタイ語（ラオス語がわからないので）を、目を大きく開いて一生懸命理解しようとしてくれました。その真っ直ぐな瞳が心に残ります。このような素敵な機会を与えてくださった「ラオスのこども」事務局の皆様、ラオス航空様、本当にありがとうございます。（幅みち子さん）

ラオスの学校図書室 10 年の 歴史上最大の危機！？

小中高校の空き教室を利用して学校図書室（ハクアン）の整備を始めたのは1995年。それから10年で、ラオス全国100か所に増えました（2004年6月末）。ハクアンは、開設後も毎年1回、2～3月ごろに図書150冊ほどを補充し、同時に各校の担当教員から活動状況の報告を受けてきました。ところが…

再現！2005年1月。ヴィエンチャン事務所ミーティングでの緊迫したやりとりの一部始終（登場スタッフ：赤井、A、B、C、D）

C：そろそろハクアンの補充図書の準備をしないと。昨日、ある学校から電話があったんだよ。”今年の補充はいつごろ？何冊？”って。

赤：それが…、東京からの連絡では、今年の補充予算は30校分しかないんだって

A：えっ！100校に補充しなきゃいけないのに？

赤：うん…。どうしよう。

A：30校分の予算を100校で分けよう。1校分は少なくなるけど。

赤：それが実は、毎年同じ学校の支援を継続してくれている人や会社からの寄付が14校分あって、それは指定の学校以外には回せないのよ。

A：指定がない16校分を残りの86校で分けたら？（パチパチと電卓をたたく）あ～、1校に25冊か…

B：200人、300人の生徒がいる学校には少なすぎるね。

C：中学高校なんて、1000人というところもあるし。

D：それに、去年と同じ150冊の学校と、25冊しか来ない学校と、差が出ると、少ないほうの先生は、やる気がなくなっちゃうかも…

赤：差が出るのが問題なら、今年度は補充を中止して、来年度に全校に平等に補充しようか？

B：そんなあ…。先生は古い本を丁寧に修理して使っているけど、それも限界があるし、子どもたちだって、いつも同じ本ばかりだと、だんだん興味がなくなっちゃうよ。

C：毎年、補充の本が届くと、先生たち張り切るからねえ。夏休みまでに本の登録を終わらせたい、新しい本を1日も早く子どもに読ませたいって。でも、本が来なかったら…

A：学校での読書を活性化するためにも、私たちが学校の状況を把握するためにも、補充は毎年必要な活動なんだから、中止するわけには行かないでしょう。

B：でも、オープンして7年も8年も経っている学校は、そこそこ蔵書が増えているから、もう補充しなくてもいいんじゃない？

D：そうは言っても、新しく出た本が1冊も来ないとなると、どうかな。子どもたちには、もっといろいろな本が必要だよ。

A：オープン後5年未満と5年以上に分けて、5年以上の所は補充を少な目にしたら？

赤：…（電卓をパチパチ）

一同：…（赤井の手元を見つめる）

苦心のやりくりの末、今年度は次のように補充を行いました。

・支援先指定14校には、図書150冊と本の修理用の材料や事務用品を補充。

・オープン後5年以上の43校

小学校：68種類、合計103冊

中学・高校：39種類、合計55冊

・オープン後5年未満の43校

小学校：74種類、合計129冊

中学・高校：39種類、合計78冊

ヴィエンチャン都内の学校図書室に対しては、3月25日に定例の活動報告会を行ったあと、図書を直接渡しました。

冊数の差がそれほど出ずに済んだのは、会が出版した本の割合を増やしてバランスをとったためです。



「補充」は学校図書室のライフライン。
止めるわけには行きません。

新しい本、違う物語を読む楽しみが、子どもたちの本への興味と好奇心を持続させ、また、先生の意欲をかき立て、学校でのいきいきとした読書活動を可能にしています。一部の学校では、村人たちに声をかけて本を譲ってもらったり、たまたま外国の機関等から寄贈された本を周辺の学校と分け合うなど、担当教員の工夫や努力で、独自に蔵書を増やしています。こうした取り組みを他校にも紹介し、自助努力を促していますが、社会全体に本が不足している現状では、急に補充を止めるわけにはいきません。

ところが、図書補充という活動には支援を得にくい側面があります。支援の結果が目に見える「学校図書室」と比べ、「補充」の成果は「子どもの読書が活発になった」など、形や数字に表れにくく、また、表れるのに時間がかかる性質のものです。さらに、「学校図書室」が「本がない」という困難を解消する活動であるのに対し、「補充」は「本がある」という現状を維持するための活動。医療にたとえば、「治療」と「健康管理」の違いがあります。

「補充」は、開設した学校図書室を生かし続ける、大事なライフライン。学校図書室が100を超え、その重要性はますます高まっています。とはいえ、将来は学校が自力で図書を確保し、図書室を運営し、活動を維持しなければなりません。今後、学校図書室の自立運営をどのように促していくのか。会では、仮に次のような方針を立てました。

- ・開設後5年間は補充を行う。
- ・5年間で自立できるよう、段階的に補充を減らす。
- ・本を何らかの対価物と交換する仕組みをつくり、自力で本を確保するよう促す。

この方針に基づき、「指定募金」をリニューアルしました。これまでは絵本印刷と図書補充が別々でしたが、印刷または図書セットの配付という柔軟な形で子どもたちにより多くの本を届けられるよう、一本化しました。(9ページ参照)

1999年以来、学校図書室の全国規模の会議は行われていません。先述の医療のたとえで言うなら、会議は集団健診のようなもの。会議後の開設校が、会議参加校の3倍近くに増えた今、現場の先生たちと共に自立への道筋を描き、方針を共有し、協力していくために、新たな会議の開催も必要です。

ラオスの子どもたちが読書を通じて生きる力を伸ばすことができる環境を整備、維持するために、活動へのご理解とご協力をお願いします。(小川直美)



<学校図書室の概要>

●「ハクアン」はラオス語で「読書を愛する」という意味。外務省 NGO 事業補助金（2003 年度で終了）、個人や企業・団体からの指定募金（1998 年～）、ベルマークの「友愛援助」を通じた日本全国の学校からの寄付（2001 年～）等によって、近年では毎年 10 校ほどに開設されている。1999 年には学校図書室評価会議を開催。当時開設されていた 34 か所全てのハクアンが参加した。2003 年度末時点で 100 校が活動しており、2004 年度にはさらに 35 校が加わった。

●空き教室に本棚や読書机・イスなどを用意し、図書 150～200 種類、計 4～500 冊の他、貸出カードや貸出記録ノート等の文具、図書を修理するための材料をセットにして配付。先生に研修を行い、蔵書管理などの運営ノウハウから、子どもを本に惹き付けるための読み聞かせなどを学んでもらい、オープンする。

●比較的規模が大きく、余剰教室があり、熱心な先生が責任をもって運営できると判断された学校が対象となった。その後、中学・高校への整備に力を入れ、民族学校や幼稚園なども対象としてきた。2004 年 6 月末現在、小学校 73、中学・高校 53、その他 9 か所（地域図書館や職業訓練センター等）で開設。

●ハクアンへの図書補充は、外務省 NGO 事業補助金（2003 年度で終了）、指定募金でまかなわれていた。指定募金は、当初は学校図書室開設募金に翌年の補充費を含む形で募集していたが、その後、補充を別建てで指定する形に。企業が開設を支援したハクアンに対し、その後も継続して補充費用を支援していただくケースもある。

● JICA との開発パートナー事業「ラオスにおける読書推進運動支援」

「継続」のカギが見えてきた——終了時評価に同行して

5月9日から17日まで、JICA との開発パートナー事業「ラオスにおける読書推進運動支援」の終了（2005年11月予定）を前に終了時評価をラオスで実施しました。

事業の進捗状況、目標・成果の達成状況、現在の課題などを確認するため、学校など関係者へのインタビューを行いました。訪問先で感じたことをお伝えします（評価の詳細は次号以降に報告します）。

「ここでネズミが出たのを覚えているかい？」

ヴィエンチャン県ポンカム小学校の入り口で、教育局の係官が話しかけてきました。

「も、もちろん」

2年前、この学校に図書が来る直前におきた「ネズミ事件」！ スタッフが引き出しに詰め込まれていた本の束をつかんで引っ張り出した瞬間、本と引き出しの間で眠っていた子ネズミを一緒につかんで大騒ぎになったのです。

1年後、この部屋は、見違えるように明るい図書室に変身していました。（詳しくは通信30号に）。そして今年は絵も増え、図書の中には子どもたちの作品も加わり、さらに楽しい雰囲気になりました。

別の小学校の図書室も昨年よりにぎやかになっていました。天井は紙細工で飾られ（よく見ると手書きの文字が…書き取りノートのリサイクル）、ここにも子どもたちの手作り絵本が並んでいました。動物が主人公のほほえましい作品ばかりで、中には未完の大作(?)も。

またある学校では、校庭の木に本を20冊ほど入れた図書カゴや図書段ボール箱が吊してありました。昼休みになると子どもたちが駆け寄ってきて、お目当ての本を取り出して木陰で読んだり、大事に抱えて自宅に

持ち帰ったり、読書はしっかり学校生活に定着していました。

どの学校でも、訪問するたびに明らかによくなっているのがわかりました。図書箱・図書袋を配り、本を補充して箱や袋に入りきらなくなると、住民の協力で図書室が生まれ、絵やポスターなどが飾られていきます。空きスペースがない所でも、カゴなどを利用して子どもたちが読める工夫がなされています。「図書室が進化している」と実感しました。

学校の調査を通してわかったことは、読書推進活動継続のカギは図書の補充、そして訪問ということ。少しずつでも本を補充し、訪問を続けることは学校にとって励みになり、次は自分たちの工夫をぜひ見てほしい、という気持ちが生まれてきます。図書の配付をきっかけに学校が、地域がまとまり、良きサイクルが形成されていきます。

帰り道、いくつかの学校が道路沿いに見えました。ここで曲がって校門をくぐれば、この学校が変わるきっかけを作れるのかもしれない、と車の中で思いながら走り去る校舎を見送りました。

（近藤知子）

●読書推進運動 教員養成校における人材育成事業

ついにカリキュラムに！ 読書推進の科目、教員養成校で

先生の卵たちが読書指導を学んで教育現場に臨む。これは、読書推進運動の自立に向けて、会が取り組んできたことです。

会では国際開発救援財団(FIDR)の支援を受けて、2002年より教員養成学校の講師のための研修、指導書(講師用)と教科書(学生用)の作成を進めるとともに、ラオス教育省に読書推進の科目のカリキュラム化を働きかけてきました。

2005年3月10日、ラオス全国8校の教員養成学校の先生方がヴィエンチャンに集まりました。読書推進の科目の授業を試験的に導入した結果を評価し、編集を

進めてきた指導書と教科書の内容を、より現場の先生が指導しやすいように、手直しするためです。

カリキュラム化は、2007年から実施されとのこと。必修科目と選択科目が設けられ、必修はラオス語(国語)の中で2年間で11時間行われます。これによって、やがてラオス全域に読書指導のできる先生が広がっていくことになるでしょう。予想以上に早くカリキュラム化が実現したことにラオス側関係者も驚いていました。読書推進運動の蓄積の成果といえるでしょう。（森 透）

ロンドン からの 報告

図書袋に感嘆の声 イギリスの大学で活動を紹介



04 年秋、イギリスのローハンプトン大学で開かれた IBBY（国際児童図書評議会）が主催する会議で、留学中の会のボランティア、伊東幸恵さんが「ラオスのこども」の活動を紹介する機会に恵まれました。伊東さんからの報告です。

IBBY (International Board on Books for Young People) とは、第二次大戦後に誕生した、子どもと本を結ぶという使命を持った NPO です。第二次大戦下のドイツでは、こどもの本が多数焼かれてしまうという悲しい出来事が起きました。そして戦後の荒廃の中、復興に向けて動き出したドイツで、イエラ・レップマンという教育アドバイザーの女性がまず行ったことは、夢や希望、そして想像力を謳ったこどもの本を、再びドイツに普及させるということだったのです。子どもたちに「精神の糧」となる本を与えよう——このレップマンの理念が、IBBY の発端となりました。それ以来、IBBY は、世界各地で子どもと本を結ぶ運動をしている団体の奨励などを行っています。

『ラオスのこども』の活動が、IBBY の理念にぴったりなので、活動紹介してみませんか？

と先生から言われ、会議での活動報告という機会を得ることになったのです。集まったのは、研究者、学生、出版や図書館に関わっている人々。もちろん、ラオスのこどもの本事情について聞くのは初めてで、みんな非常に興味を持って聞いてくれました。

紙芝居というメディアに触れるのは初めてという人も多く、図書袋に関して、写真を交えながら説明したときには感嘆の声が挙がりました。ラオスの口承文芸に興味を持った人もおり、口承文芸と文字文芸は共存するのかということを懸念した人もいました。イギリスの方々にとっても、また私にとっても、非常に学ぶことの多い発表であったと思います。

私は現在イギリスで児童文学を専攻しているのですが、私がこの分野を勉強しようと思ったきっかけは、

「子どもの本って、子どもに夢や希望や想像力、それから幸せを与えることができるよなあ」という単純な理由からです。

苦難を乗り越えて幸せをつかむ主人公に自分を重ねて、自らの苦難に耐えることの出来る子どもがいるかもしれません。本の中の登場人物を自らの友だちと考えて、寂しさを紛らわせることが出来る子どももいるでしょう。たとえ悲しいことがあったとしても、想像の世界に浸ることで、悲しみから解放される子どももいるのではないのでしょうか。どんなに辛いことや悲しいことが起こっても、人は、想像力で生き抜けるのだと思います。戦後ドイツにおける子どものための復興が、子どもの本から始まったように、子どもの本は、子どもにとっての生きる糧となるといえましょう。そして、「ラオスのこども」の活動は、このような子どもの本の価値を、何度も私に信じさせてくれました。

私は昨年、ラオスに行く機会があったのですが、そこで見た風景は、本が愛されている風景であり、皆が子どもの本の価値を信じている現場でした。あの経験は、今も私の勉強の大きな心の支えとなっています。いつか、私が現在勉強していることが、「ラオスのこども」のような活動の役に立ったらどんなに幸せかしら、と願ってやみません。

（ボランティア 伊東幸恵さん）



国内の活動

2005年3月～5月

ラオスのお正月

「サバイディー・ピーマイ・パーティー2005」開催

4/23 ライフコミュニティ西馬込（大田区）
ラオスや活動を様々な角度で紹介し、会の活動に参加するきっかけをつかんでもらおうと、ボランティアが中心となって2月から準備してきました。中でも一番の目玉は「ラオス往復航空券」をかけた大抽選会。厳正なる抽選の結果、見事2名の方が当選しました（当選者のひとり幅さんのラオス訪問記は3ページに掲載。もう1名の方は日程が合わず辞退されました）。来場者は140人、ボランティア31人、ラオスからの留学生14人、合計185人が参加しました。ご来場、ご協力ありがとうございました。収益金はラオスでの教育支援活動のために大切に用いさせていただきます。また、ご協賛、ご後援に心から感謝申し上げます。協賛：ラオス国営航空 キックーマン（株）／後援：ラオス大使館／食材協力：文化堂西馬込店

<プログラム・展示>

対談「ラオスの子どもたちと日本の私たち」チャントソン×近藤知子／バーシー式／ラオスの紙芝居の実演／留学生による伝統舞踊・伝統音楽／ラオス現代人形劇「カボーンラーオ」紹介／大抽選会／子ども文化センター写真展／やべみつのりさん絵本原画展／ラオスの絵本展／手工芸品販売

※「カボーンラーオ」来日のための募金を会場で呼びかけたところ、37,333円のご協力をいただいた、とのお礼と報告が、あさぬまちずさんから届きました。

<ラオス料理メニュー>

クレソンのサラダ／にんじんとパパイヤのサラダ／ラープ（ラオス風牛肉のたたき）／豚肉とバジルの炒め物／鶏肉とたけのこのカレー素麺／もち米（黒米入り）／ラオス風ソーセージ／干し肉／フランスパンのラオス風2種／ナムワーン（ラオス風みつ豆）／カフェラオ／レモングラスティ／ビール／ビアラオ（別料金）／ロゼワイン、マンゴージュース（キックーマン協賛）



イベント

土曜公開講座「ラオスってどんなくに？」

3/19 札幌市立福住小学校（札幌市）

春休み中の小学校でラオスの紹介とラオスの紙芝居の実演などを行いました。子どもと大人合わせて10人ほどが参加。

NGO こども探検隊！～みんなもできるボランティア～

3/20 札幌コンベンションセンター（札幌市）

NHK「週間こどもニュース」お父さん役（当時）の池上彰さんの講演と子ども支援NGOの紹介とボランティア体験。会は絵本にラオス語翻訳を貼る活動の体験と、ラオスの絵本の読み聞かせを行いました。小学生と保護者など100人ほどが参加しました。



活動報告会

4/2 荏原第三区民センター（品川区）

ラオス駐在スタッフ赤井朱子が、図書箱、図書袋を利用する子どもたちの様子や、読書推進セミナーの実際を、映像を交えて詳しく報告。24人が参加しました。

ラオス語絵本プロジェクト

日本の絵本にラオス語翻訳を貼り付けてラオスで活用します。

「今年もやります ラオスの子どもに絵本を贈ろう!!」

4/21 住友商事株式会社

社員のみなさんのほか、学生など約20人が参加し、26冊の絵本ができました。チャントソンのラオス活動報告、絵本の展示、手工芸品販売も併せて開催。

「社員ボランティアデー」

5/10 オムロン株式会社技術統括センター

創業記念日の社員ボランティアとして、絵本にラオス語の翻訳を貼る活動に取り組んでくださいました。約25人が参加、40冊の絵本ができました。



個人情報の管理は、厳重に行っています

個人情報保護法の施行にあたって

2005年4月から個人情報保護法が施行され、個人情報を扱う事業者は、個人の権利と利益を守るため、義務などが定められました。

私たちNGOは、個人の方々のご寄付、ご協力、ご支持が活動の基盤となっており、「ラオスのこども」は皆さまから住所をお知らせいただき、『ラオスのこども通信』の発送、その他のご連絡に使用させていただいています。

個人情報保護法は、氏名、住所、電話番号など個人情報の利用について、主に次のように義務づけています。

●住所などをお聞きする際には利用目的を明確にし、通知・公表する。

●目的以外の利用は、本人の同意が必要。

●情報が漏洩しないよう対策を講じ、従業員、委託業者を監督する。

●個人の同意なしに、第三者に情報を提供しない。

「ラオスのこども」は、名簿は特定の担当者が扱い、その管理を厳重にしています。他への使い回しはしていないことをご報告します。

今後ともご支援くださいますよう、お願い申し上げます。

特定非営利活動法人 ラオスのこども

2005年度指定募金が リニューアル!

募集期間 第1期 2005年7月～12月

第2期 2006年1月～6月

- ・一口の金額が身近になり、より気軽にご支援いただけます。
- ・講座や学校など支援対象を個別には指定せず、全体を支える仕組みです。現地ニーズに柔軟に対応し、より効率的に運用されます。

- ・ご入金後に写真入りの受領証をお送りし、実施状況は「ラオスのこども通信」誌上でご報告します。

- ・これまで同様、金額は事務管理費を含んでいます。

- ・第1期にお寄せいただいた分は今年度、第2期の分は翌年度の実施となります。

◆もっともっと絵本募金◆ <NEW>

一口1500円で、本の出版や、学校図書室への図書セットの配付など、子どもたちにもっとたくさんの本を届け、読書活動の継続を支えます。例えば10口で図書セット1校分、5口でミニ図書セット1校分に相当します。(100口以上で絵本の出版を支援することもできますので、ご相談ください)

募集目標：500口

◆こどもの未来募金◆ <NEW>

一口4000円で、子どもたちが様々な危険から離れ安心して過ごせる居場所、表現活動を通じて生きる力を身につける場所である「子ども文化センター」や「子ども教育開発センター」を支えます。例えば12口で子どものための講座1つを1年間支えることに相当します。(100口以上でお名前名のプレートを設置することもできますので、ご相談ください)

募集目標：300口

◆本のある学校募金◆

一口18万円で、小・中・高校の空き教室を整備して、学校図書室を開設します。1口で1校に開設。

※2004年度後半の募金や現在申請中の支援で今年度の開設予定分を実施できる見通しのため、新規募集はありませんが、「もっともっと絵本募金」で学校図書室を引き続き応援してください。

◆スタッフサポート募金◆

一口5000円で、全てのプロジェクトをより効果的に、より安定的に実施するために日夜活動している「ヴィエンチャン事務所」と「東京事務所」の運営を支えます。

事務局より

■書き損じハガキ収集キャンペーン継続中

50円の未投函の官製ハガキ35枚で絵本5冊相当の支援となります。お寄せいただいた書き損じハガキは、個人情報に細心の注意を払い限定されたスタッフが取扱います。同封のチラシ（そのまま送れる包装キット）もご利用ください。

■2005年度通常総会

活動会員による意思決定の場です。2004年度活動報告と決算の議決、2005年度計画と予算の報告を行います。賛助会員は議決権はありませんが、発言することができます。会員交流の機会でもありますので、ぜひご参加ください。詳細は同封のチラシをご覧ください。

日時：8月13日（土）13:00～17:00

場所：ライフコミュニティ西馬込 特別研修室

■麻布十番納涼祭り国際バザール

1999年から毎年、ラオス料理屋台を出店しています。詳細は7月末ごろにホームページなどでお知らせします。

期間：8月19日（金）～21日（日）

時間：15:00～20:30

場所：一の橋親水公園（東京都港区）

■国際協力フェスティバル（仮称）

日本最大の国際協カイベント。当会も参加を予定しています。なお、今年はイベント名称が変わる予定です。

期間：10月1日（土）・2日（日）

場所：日比谷公園（東京都）

■紙芝居文化推進協議会が

手づくり紙芝居コンクールの作品を募集

応募〆切は9月16日（金）、本審査は11月27日（日）です。

お問い合わせは神奈川県立図書館視聴覚部業務課まで。

TEL：045-263-5906

■アユス「お返しプロジェクト」のご案内

冠婚葬祭などの「お返し」をNGOや市民団体への支援という形に代えて、社会に役立てる仕組みで、支援対象24団体に当会も参加しています。お問い合わせ・お申し込みは特定非営利活動法人アユス仏教国際協力ネットワークまで。

TEL：03-3820-5831 e-mail：tokyo@ayus.org

■「ラオスのこども通信」35号は12月ごろ発行の予定です。

＜ラオス事務所の動き＞

3月

3/10-14 教員養成校読書推進事業 評価会議とテキスト改訂編集会議（森、チャンタソン、赤井）

3/12 子ども教育開発センター（CEC）イベント開催

3/14 NGO ミーティング（JANM）に出席

3/22-24 チャンパサック教員養成校読書推進セミナー視察（チャンシー）

3/25 ヴィエンチャン都内学校図書室（ハクアン）担当者年次報告会

3/30-31 サワナケート教員養成校読書推進セミナー視察（バンオン）

4月

4/ 8 事務所大掃除

4/11 事務所ピーマイパーティー

4/14-18 ピーマイ休暇

4/19 出版委員会

4/20 学習院女子大学研修下見

4/27 CEC 次年度計画打ち合わせ（ヴィエンチャン都教育局）

5月

5/9-17 開発パートナー事業終了時評価調査団訪問（チャンタソン、近藤、赤井が同行）

5/26 JANMに出席

＜東京事務所の動き＞

3月

3/ 5 活動説明会

3/9-13 森、ラオス出張

3/9・11 大田区国際交流ボランティア講座で活動紹介（近藤・小川）

3/13 運営会議

3/16 赤井が一時帰国～4/4

3/19 札幌市立福住小学校でお話（小川）

3/20 NGO こども探検隊（札幌市）に参加（小川）

3/26 理事会

4月

4/ 2 赤井帰国報告会

4/ 7 通信34号発行

4/10 運営会議／ピーマイボランティア顔合わせ

4/16 清泉女子大学NGOフェアで活動紹介（近藤・森）

4/20 和光大学インターンまつり（資料参加）

4/21 住友商事（株）でラオス語絵本づくり体験

4/23 サバイディー・ピーマイ・パーティー

4/30 理事会

5月

5/3-5/15 チャンタソン、ラオス出張

5/8-5/22 近藤、ラオス出張

5/ 8 運営会議／ピーマイ打ち上げ

5/10 オムロン（株）でラオス語絵本づくり体験

5/12 大田区国際交流団体懇談会に出席（小川・佐藤）

5/13 紙芝居文化推進協議会総会に出席（小川）

5/21 活動説明会

5/28 理事会

NGO ネットワーク



おともだちパネル展でアピール 「世界中の子どもに教育を」キャンペーン

東京・青山の「こどもの城」ギャラリーで、世界のすべての子どもが学校に行けるようになることを広く社会に訴えて、2005年4月19日から24日まで、「おともだちパネル」のコンテストと展示会を開催しました。

これは、毎年、世界約100か国で行われている「世界中の子どもに教育を」キャンペーンの活動で、日本では、ラオスのこどもが参加する JNNE（教育協力 NGO ネットワーク）と日教組などが主催しています（代表を当会の森が務めました）。

世界には学校に行くことができない子どもが1億人以上います。国際機関や各国政府は2015年までに無償で質のよい教育を用意する約束をしていますが、それが守られるように、おとなと子どもとで、人々に訴え、政府に約束を守るように働きかけるという運動です。

昨年は子ども国会を高校生、大学生とおとなで開催し、子どもたちから政治家に、世界と日本の教育が抱える問題についての意見書を手渡しました。

今年は、子どもと等身大の絵を「おともだちパネル」として公募した作品を集め、「おともだちを学校に行けるようにして欲しい！」「日本の途上国援助を、もっと子どもたちの教育のために使うように！」とアピールしました。

日本各地から46の応募作品が集まり、作者は、小学生から大人まで、日本人もインターナショナル・スクールの子ともいて様々でした。コンテストで選ばれた作品は、日本の国会議員への働きかけと、G8など世界のリーダーが集まる会議に合わせて、海外での展示を予定しています。（森 透）

現場の強みを活かし、日本の援助政策に提言を JNNE（教育協力 NGO ネットワーク）

「ラオスのこども」のようにプロジェクトの現場を持って、支援活動をする NGO は、その土地で長く活動することで、現場をよく知っているという強みがあります。とはいえ、「外部者」である NGO によるプロジェクトは「非日常」のものであり、いずれ「撤退」し、その後の活動は、地元の行政や住民などが担い手となって「自立」的に取り組まれていくべきものです。

今日、NGO にとっての課題は、この撤退と自立です。日本の教育関係の NGO（25団体）などによる JNNE（教育協力 NGO ネットワーク）の研究会（座長：森透）は、この課題をめぐって研究活動を進めてきました。撤退と自立へのカギは、担い手が育つこと、そして政策に組み込まれることといえます。ラオスのこどもの場合は、作家や先生の育成、教員養成学校での読書指導の科目のカリキュラム化などがあります。現場での実績こそが、政策に取り込まれるための推進力となるのです。

さて、JNNE では、日本政府の途上国への援助政策に対する政策提言も重要な課題としています。日本は、世界の国々に、これまで、約26兆円（1961年～2001年）ものお金（ローンも含む）を援助しています。しかし、子どもたちが教育を受けるためのお金は、そのうちの1%にもなりません（オランダは7%）。

世界の国々は「EFA : Education for All」、すべての人への教育を目標に掲げ、2015年の達成をめざしていて、JNNE は日本政府に対して、ODA（政府開発援助）を、基礎教育への投入拡大を提言しています。私たちは、現場を知る立場を活かした、政策への提言能力を高めていくことが求められています。（森 透）